

〈研究ノート〉

近世ヨーロッパにおける学問の公共性

その一事例としてのメルセンヌ・アカデミーと彼の思想

筒井一穂

17世紀は、諸学問における周知の通りの目覚ましい革新が、いくつかの天才的精神によって推し進められた時代である。ガリレイ、ホッブズ、デカルト、スピノザ、パスカル、ライプニッツ、ロック…。近現代的な学問観が、彼らの諸々の学説によって、あるいはそれへの批判を通じて構築されたものであることは、もはや言うまでもないことである。

だが、彼ら17世紀の哲学者たちは、天才と呼ぶにふさわしい知の巨人として称賛されると同時に、知の占有者として批判されることもしばしばである。形而上学、自然学、数学などの諸学に通暁し、学問の体系全体を一人で見渡してしまうような哲学者。いわゆる「知識の個人主義」の典型である(大沢1996, 15)。またそのような個人がいやしくも知を所有するためには、いかなる知識も形而上学的な基礎づけを俟たねばならず、そうした基礎づけが彼の心の内部でなされていなくてはならない。認識論の用語で言えば「内在主義的基礎づけ主義」の立場である。17世紀の哲学がこうした知の個人主義のもとに理解されるならば、当然のこととその難点もそこに由来することになる。研究の専門家、分業化、そして相互協力が常識となった今日にあっては、個人主義を主導した近世哲学は宿痾となるからである。

こうした批判的見解に反して、むしろ17世紀哲学における知の公共性が強調される必要がある。たしかに認識論的には、内在主義的基礎づけ主義というべき傾向がひろく看取されるのだが、それでも、彼らにとって学問知識は個人的に占有されるべきものではなかった。有望な新人の紹介から問題含

みの新刊の回し読み、研究成果の報告・批判的検討に至る様々な集団的活動が、むしろ彼らの研究活動の支えとなっていたのである。

こうしたいくつもの知識人共同体は、いまやその痕跡を発見することが困難となった無数の連絡を通じて構築された複雑なネットワークのもとに成り立っていた。このネットワークは主として書簡によって結ばれた（この時代の書簡は、友人間での回し読みが常となっていたので、公的なそれなりの気配りのもとで書かれた）。彼らが実際に膝を突き合わせて対話に臨んだのは、友人同士の邸宅や修道院の片隅などいずれにしても主として私的な場で開かれた講演会や研究会であり、これが特定の分野に関して、一定のメンバーによって、定期的で開催されるようになるとアカデミーと呼ばれる。当時大学のような公的学問機関は「スコラ学派の牙城」であったために、学者が自由に研究に勤しんだのは大学よりもむしろアカデミーにおいてであった。その他、検閲を逃れるために地下写本が流通し、人目を忍ぶ会合のためにキャバレーが利用されるなど、映画さながらの交流もあったと言われる（赤木2003, 12）。

要するに、17世紀の哲学者たちは、決して個々人の書齋に閉じこもっていたのではなく、むしろかなり多様な仕方で知識人社会を形成していたのである。ところでこの知識人社会には、人々をまとめる幹事として働いたり、有望な若手をスカウトしたりするような中心的人物がいた。本稿で取り上げるマラン・メルセンヌは、まぎれもなくそのような中心人物の一人である。むしろ、メルセンヌは学者と学者の仲介人を務めただけでなく、彼自身ひとりの優れた学者であったが、それでもやはり、彼の交友関係が17世紀の哲学にもたらした影響は後述のように小さからぬものである。彼の創始した「メルセンヌ・アカデミー」もしくは「アカデミア・パリシエンシス」は、仏科学アカデミー（1666）やイギリス王立学会（1660）の先駆けとなった。

本稿の目的は、メルセンヌ研究のサーヴェイである。とはいえ、文献の網羅的な陳列ではなく、むしろ、近世における学問の公共性というテーマに即し、それに対するメルセンヌの貢献を窺い知ることができるように先行研究を配置し整理することを目指す。この目的のために、次の三つの段階を踏もう。(1) メルセンヌの生涯と著作を簡単に整理する。(2) メルセンヌ・アカデミーの活動をまとめる。(3) メルセンヌの哲学的立場に関する主要研究をレビューする。

1. メルセンヌの生涯と著作

メルセンヌの生涯に関しては、同時代人 De Coste (1649) の伝記が一次資料である。標準的な二次資料は、メルセンヌの思想についての記念碑的な研究書である Lenoble (1971) の第一章、および『メルセンヌ全書簡集』第一巻冒頭に収められた編者 De Waard による伝記、この二書である（川田 1995, 280-281）。こうした浩瀚な伝記に対して、より気軽に頼りにすることができるのは、Hamou (2018) の第一節だろう。

ここでは以上の研究から、メルセンヌの著作・書簡と、主な出来事を年表の形にまとめてみよう（以下の図を参照）。生涯における主な出来事に関しては、上記の伝記的研究を参考に、主なもののみを記載した。著作一覧は Hamou (2018) に依拠した。書簡は、『全書簡集』最終巻の付録を参照した (CM XVII, 127-161)。この年表から見て取れるのは、第一に、メルセンヌが多くの文通相手を持っていたということである。メルセンヌの書簡集は、全 17 巻にもものぼる。表に記したのは直接の文通相手の一部であるが、間接的に書簡を閲覧していた相手を含めればもっと多いはずである。後に紹介するアカデミー活動は、まさにこうした交友関係を土台としている。

第二に、メルセンヌがほとんどパリから地理的な移動をしていないことである。何度かの旅行を除けば、彼はパリを拠点としてここに留まった。もっとも当代の学問活動の中心はパリにあったから、外に出向く必要も少なかったと言えるが、その反面、メルセンヌが各地の友と連絡する際に、書簡が占めていた役割の重要性を伺うこともできる。

第三に、メルセンヌが比較的多くの著作を世に送り出しているということである。なかには 1000 頁を超える大著もある。このことは、メルセンヌが著述家としても势力的に活動していたことを示す。

第四に、メルセンヌの著作には『普遍的調和論』をはじめとする音楽論が含まれる。彼は数学や自然学にも通曉したが、音楽を特に好み、自らの専門として研究した（川田 1998, 117）。

第五に、ガリレイやデカルト、ホブズといった、間違いなく優秀であるが必ずしも世間に受け入れられなかった哲学者たちを積極的にサポートしているということである。ガリレイについてはフランスでその思想を広めるために訳本を作成し、個人的に交流を図ってもいる（CM IX, 125-6. 結局メルセンヌからの手紙はガリレイに無視されたので、交流は実現しなかった）。

デカルトに対しては、各地の知識人たちの仕事を逐次報告し、また主著『省察』に対する「反論と答弁」のいくつかをかき集めた。ホッブズは、フランスに亡命した際にメルセンヌの庇護を受け、見聞を広めた。なお、以下は年表には記載しなかったが、ガッサンディの弟子でその全集の刊行者として知られるソルビエール (Samuel Sorbière, 1615-1670) による『市民論 *De Cive*』の仏訳の出版にも助力した (Hamou 2018)。また、イングランドの理神論者ハーバート (Herbert of Cherbury, 1583-1648) の『真理論 *De Veritate*』の仏訳を手掛けたとも言われる (Lenoble 1943, 561-2. 現在は散逸)。これらのことから、メルセンヌのいわば裏方的な貢献を窺うのは難しくない。

西暦	出来事 (主語メルセンヌは省略)	著作物	書簡 (現存するものに限る)
1588	仏オワゼに生まれる ホッブズ生まれる		
1596	デカルト生まれる		
1604	ラ・フレーシュ学院入学		
1606	デカルト、ラ・フレーシュ学院入学		
1607	フェルマー生まれる		
1611	ミニム会修道士となる		
1616	ペレスクのなかだちにより、パリの知識人と交流を始める		
1623	ブレーズ・パスカル生まれる	『理性の使用法 <i>L'Usage de la raison</i> 』 『創世記問題集 <i>Quaestiones celeberrimae in Genesim</i> 』 『靈的生の分析 <i>L'Analyse de la vie spirituelle</i> 』 散逸	
1624		『当代の理神論者、無神論者、リベルタンの不敬虔について <i>L'Impiété des déistes, athées et libertins de ce temps</i> 』	
1625		『諸学の真理：懐疑主義者あるいはピュロン主義者論駁 <i>La Vérité des sciences contre les septiques ou Pyrrhoniens</i> 』	
1626		『数学摘要 <i>Synopsis mathematica</i> 』	デカルトからの最初の書簡
1627		『普遍的調和論 <i>Traité de l'harmonie universelle</i> 』	

1628	教皇特使バニ枢機卿邸での会合に、デカルトやベリユール枢機卿らとともに参加		
1629	この頃から、ガリレオやプロテスタント等に対して緩和的な態度をとりはじめる		ペレスクからの最初の書簡。
1630	オランダ旅行	『重さをもつ物体の運動と衝突について <i>Traité des mouvemens et de la chute des corps pesans</i> 』	ガッサンディからの最初の書簡
1633	このころから、パリの学者たちの自宅で毎木曜日に研究・交流会を開く。メルセンヌ・アカデミーの前史		
1634		『未聞の問題あるいは知識人の再生 <i>Questions Inouyes ou recreation des sçavans</i> 』 『調和の問題 <i>Questions harmoniques</i> 』・『神学、自然学、道徳学、数学の問題 <i>Questions théologiques, physiques, morales et mathématiques</i> 』 『普遍的調和論の序 <i>Les Préludes de l'harmonie universelle</i> 』・『ガリレイの機械論 <i>Les Mécaniques de Galilée</i> 』	
1635	このころ、メルセンヌ・アカデミー発足		
1636		『普遍的調和 <i>Harmonie universelle</i> 』 vol. 1	
1637		『普遍的調和』 vol. 2.	フェルマーからの最初の書簡
1638			リヴェエからの最初の書簡
1639		『ガリレイの新たな思想 <i>Les Nouvelles Pensées de Galilée</i> 』	
1640	ホップズ、パリへ亡命		父ホイヘンスからの最初の書簡 ヴォエティウスからの最初の書簡
1641			ホップズからの最初の書簡
1643			ソルビエールからの最初の書簡 グロティウスからの最初の書簡

1644	イタリア旅行 ~45	『普遍的幾何学の摘要 <i>Universae geometriae synopsis</i> 』 『自然学および数学に関する思索 <i>Cogitata physico mathematica</i> 』	トリチェリからの最初の書簡
1647		『自然学・数学に関する新たな観察 <i>Novarum observationum physico-mathematicarum</i> 』	ティボーからの最初の書簡
1648	歿。60歳		
1651		『新たに解明された光学および反射光学 <i>L'Optique et la catoptrique nouvellement mise en lumière</i> 』	

2. メルセンヌ・アカデミーの活動

メルセンヌ・アカデミーの活動をまとめた研究としてまず参照すべきは、川田の二つの論文（川田 1996, 1998）である。いまでは入手しにくいという難点こそあるものの、邦語で読むことのできる数少ない研究の一つであると同時に、質的に見ても、20世紀後半のメルセンヌ研究の進展を踏まえた充実したものである。川田は、メルセンヌが当初抱いていた「アカデミー思想」は音楽人文主義の影響を受け、音楽を通じ政治・宗教に貢献し、各人の人格を陶冶し、さらには百科全書的関心を満足させるといった目標を掲げていたのに対し（川田 1996, 293）、後に彼が実際に主宰したアカデミーは、いっそう数学的で学術的な関心のもとに動いていたとして、彼の「初期アカデミー思想」と実際のアカデミーのありようとの間の隔たりを明らかにした（川田 1998, 16）。

ここでは川田の二本の論文（1996, 1998）を主軸に、必要に応じて他の研究を参照しつつ、メルセンヌ・アカデミーの成り立ちを概観しよう。（1）まずは川田（1996）に倣い、アカデミー開設にむけたメルセンヌの動機を確認する。（2）次に、川田（1998）を参照軸としながら、実際にアカデミーが形をなしていく経緯をまとめる。

（1）メルセンヌが最初にアカデミー創設の志を語ったのは、『創世記問題集』においてだった。その有名な箇所では、メルセンヌは次のように述べている。

どうかあのアカデミーがわれわれのこの世において根を下ろし、花を咲かせ実を实らせませすように。そして、このアカデミーが決して神への賛辞を中断することなく、音楽家を薫陶しますように。そしてそれらの音楽家の各々が、ありとあらゆる楽器を鳴り響かせませすように。

[...] 願わくば音楽家たちのかのアカデミーが創立されますように。そしてそれが昼となく夜となく、絶え間ない讃歌、頌歌、詩篇によって神を讃え続けますように。さらに、そのアカデミーにおいて、若者が音階に関する学問を伝授され、その結果、教会や大聖堂その他の最も熟練した歌い手がそこから選ばれて、フランス全土、いや世界が、より偉大なる神の栄光のため、またすべての人々の心を聖なる愛をもって燃え上がらせるべく、響きわたらせませすように。

この上なく善にして偉大なる神よ、どうか次のようになしたまいますように。フランスではフランス人が、他国民は彼らの王国や支配下の国々でこの仕事に着手するように。その結果、すべての人々の口から神への賛辞を大声で鳴り響かせませすように。そして栄光に満ちた天界のすばらしい音楽を武力の代わりに模倣させませすように。(Mersenne 1623, 1687.)

この箇所からわかるのは次のことである。第一に、アカデミーが世界中において創設されることがメルセンヌの希望である。この希望は『創世記問題集』の続く箇所でも何度か繰り返される（ただし、この時点でメルセンヌ自身がアカデミーを創設しようとしていると断定することはできない）。

第二に、そのアカデミーは、音楽家のアカデミーであり、音楽を専門的に学び・演奏するような場である。とはいえ、今日のわれわれの思う音楽学校とは、その基本的な学習対象（音楽理論と演奏技術）は同様であるにしても、理念において大いに異なったものである。というのも、メルセンヌの音楽論は、いわゆる「音楽人文主義 musical humanism」の流れに置かれるからである。「音楽人文主義」とは、川田（1996）によれば、音楽文化と社会情勢との相関性を認めた上で、古代ギリシアのような理想的な社会を実現させるために音楽文化の復興を目指すような立場である。ただし、「音楽人文主義」の概念を提唱した Walker は、メルセンヌがそれまでの音楽人文主義者と違って、単なる古代音楽の焼き直しを目指したのではなく、むしろ音楽の進歩を

確信していたと指摘する (Walker 1978, 84-5)。いずれにしても引用の末尾で明言されているように、理想的な音楽は、世に満ち満ちた争いへの一種の治療として役立つと考えられていたのである。要するに、メルセンヌのアカデミーへの期待は、音楽教育を通じて当代の混乱した社会状況を改善することにあつたと言える。

第三に、こうした教育は若者たちに施されるべきものとされる。若者の教育、すなわち音楽を通じたその人格の陶冶である。同書の別の箇所では、「若者の生き方をあらゆる醇風美俗へと陶冶していく」ことが目的として設定される。このように、アカデミーには研究の拠点としての役割よりもむしろ、教育機関としての役割が期待されていたのである。

メルセンヌ自身が語るように、こうしたアカデミー観は、16世紀に存在した「バイフ (Jean-Antoine de Baïf, 1532-1589) のアカデミー」に多分に影響されたものである。メルセンヌは、モーデュイ (Jacque Mauduit, 1557-1627) づてにバイフのアカデミーを知り、これをまさしく当代へ甦らせることを望んだのである (川田 1996, 287)。いずれにせよ注意を払わなくてはならないのは、この時点でメルセンヌが理想としたアカデミーは、現在われわれの思い描くアカデミーとは少なからぬ隔たりをもつという点である。今日アカデミーと言えば、学術機関、もしくは研究活動の拠点としてのあり方に重きを置くのが普通だろう。だが、メルセンヌが憧れたアカデミーは、必ずしも学問的研究の機関ではなかった。むしろ、音楽を主とする文化的・教育的活動の拠点としての役割が大きい。後述するように、彼自身が後に主宰したアカデミーは数学に特化したものであり、今日のわれわれのイメージに近いのだが、そこに至るまでにメルセンヌは何らかの思想の転回を経ているのである。

(2) すでに注意しておいたように、メルセンヌの上述のアカデミー思想は、実際に現実となった彼のアカデミーとは主旨を異とする。では、その実際のアカデミーとはどんなものだったか。それを物語るテキスト的証拠はいくつかあるが、まずは1635年ペレスク宛書簡でのメルセンヌその人の証言をみよう。

彼 [ガッサンディ] がパリへいらしたら、この街ではじまったばかりのアカデミーを見ることになるでしょう。それは世界で最も高貴なもので

す。というのは、それはまったく数学的だからです。（CM V, 28）

音楽を通じた人格陶冶や社会奉仕を旨とするような初期のアカデミーの理想とは違い、実際に創設されたのは、数学を研究対象とする、あるいは数学的厳密さに基づく、学者集団による研究会である。メルセンヌ自身の証言の他にも、ブレーズ・パスカルの姉ジルベルトによって、このアカデミーが「毎週パリで開かれていた」こと、各メンバーが「自分の仕事を持ち寄り、他人の仕事を検討した」こと、「イタリアやドイツや、その他諸外国から送られてきた提題」を検討したこと、そしてちなみに、あのブレーズが年長者たちに意見を求められるほど評価されていたことなどが伝えられている（Pascal 1908, 53）。また、王立科学アカデミーの書記を務めたフォントネル（Bernard Le Bouyer de Fontenelle, 1657-1757）は、「パリに住んでいた人々がメルセンヌの館で会合をしていた」こと、メルセンヌが「ヨーロッパの最も有能な人々」の間の「情報交換の繋ぎ手」となったこと、「ガッサンディ、デカルト、ホップズ、ロベルヴァル、パスカル父子、ブロンデルほか数名」が、「数学のいくつかの問題を提題したり、ある事柄に関する実験をするよう求めたり」していたことなどを伝えている（Fontenelle 1733, 3）。いずれにせよ、メルセンヌ・アカデミーが数学と自然学の専門家集団として機能していたことは確かなようである。

だが、メルセンヌ・アカデミーが発足した日付や組織の構成員や理念などを示した記録は残っていない。先程のペレスク宛書簡から、1635年ごろに発足したとわかるだけである。このアカデミーの始まりはおそらく、メルセンヌの私的な交友関係にある。メルセンヌは主にペレスクを通じてパリの知識人社会に招き入れられたが（Hamou 2018; Brown 1934, 11）、いつからか友人たちの自宅で不定期に勉強会・講演会が開かれるようになった。ある時期から、メルセンヌの所属していたパリのミニモ会の修道院の一面を拠点とするようになり、最終的には上述のように開催も或る程度定期的なものとなったようである。各メンバーは平素は手紙を通じてざっくばらんに意見を交わし、アカデミーでは何らかの特定の主題をめぐる発表し議論していた。今日の学会発表さながらの雰囲気だったのではないか。こうして成立の経過を眺めると、メルセンヌ・アカデミーとは言うものの、彼とその他のメンバーの間に上下関係はないし、もっぱら彼が主力となってこの会を発足したというわけでもない。たしかにホップズやフォントネルは、パリの学者集団

の或る意味での中心はメルセンヌだったと言っではいるが、それは多分に交友関係あるいは情報交換においてのことであり、必ずしも集団の指導的立場にいたということの意味するものではないのかもしれない。Armogatheは、この会が会則や書記官を用意せず、少なくともその初期においては定例の日付や場所が定まっていなかった点や、政治的な中立性を強調し、「アカデミー」という呼称が不適切ではないかとさえ提起している（Armogathe 1992, 136）。

さて、資料の僅少さゆえに実態のわかりにくいアカデミーであるが、頻繁に参加していたメンバーの一部は、書簡などの資料を通じて明らかになっている。パスカル父子、ミドルジュ、ロベルヴァル、デザルグ、シャンボン神父らである。彼らに遅れてガッサンディが加わる。ホップズはおそらく、フランス旅行中（1634-1636）にアカデミーに参加したか、もしくはそのメンバーと会合をもった。デカルトは、各地を周遊したのちパリに帰った間（1625-1628）、メルセンヌやミドルジュと会合の機会を得たが、再びアカデミーに参加したのは、メルセンヌ・デカルト双方にとっての晩年、1647年からである。その他、フェルマーやホイヘンスは、メルセンヌとの文通はあったものの、その地理的な事情のゆえにアカデミーには参加しなかったのではないかと川田は指摘する（川田 1998, 21）。

なお、メルセンヌの死後には、ブレイズ・パスカル、ピコ（Abbé Picot, 1614-1668）、ペルール（Jacques Le Pailleur, ?-1654）等の主導によって会は維持された。その後、モンモール（Henri Louis Habert de Montmor, 1600-1679）がこれを引き継ぎ、「モンモール・アカデミー」として知られるようになる（Brown 1934, 32）。また先述のように、フォントネルは、後の王立科学アカデミーにとっての間接的な先駆としてこのアカデミーに言及している。

以上はメルセンヌ・アカデミーについてのあまりに大まかなまとめだが、このアカデミーが数学・自然学的を中心とするアカデミックな傾向を強く有しており、実際に当代随一の学者コミュニティとして機能していたことは、ほぼ確かである。

3. メルセンヌの哲学と学問の公共性

上述の歴史的な諸活動とは一応別のものとして、メルセンヌの思想的・哲

学的立場についての研究史を概観してみよう。とはいえ、欧州、とりわけ本国フランスにおけるメルセンヌ研究の歴史は長い。そのため主要な研究のすべてをまとめ上げることは困難なので、ここでは特に影響力の大きい三つの古典的研究を挙げ、その他の重要な研究はこれに付随する形で示すことにしたい。(1) Lenoble の『メルセンヌと機械論の誕生』(1943)、(2) Popkin の『懐疑主義の歴史』(1960)、(3) Marion の『デカルトと白の神学』(1981)である。

(1) Robert Lenoble の『メルセンヌと機械論の誕生』(1943)は、古典的な研究でありながら、今日なおメルセンヌ研究に必携である。本書は、メルセンヌのバイオグラフィーから、神学、科学擁護論、弁神論、心理学、認識論、機械論、数学、自然学、道徳、政治学等々に至るまで、まさに網羅的に論じ尽くした大著であるため、簡潔に要約するのはきわめて困難である。ここでは最低限のこととして、表題にある通りメルセンヌの「機械論」についての Lenoble の解釈を概括しよう。

Lenoble はメルセンヌが 1634 年を境に、アリストテレス的な世界観を捨て、新科学的な機械論的世界観へと移行すると指摘する。その 1634 年、メルセンヌは四つの書物を出版したが、これらを括って Lenoble はメルセンヌの「方法序説」と呼ぶ。つまり、これら一連の書物が、メルセンヌ哲学における方法論を決定づけたというのである。メルセンヌは、実在する自然についての認識可能性には「悲観的」(Hamou 2018)であった。すなわち、自然の事象の「真の原因」について、われわれは十分に知り得ないというのである。このことから、われわれが自然における真の原理を得ることも叶わず、自然学が数学的に厳密な論証や演繹的操作によって遂行されることはできない。結果として、「自然学のうちには何も確実なことはない」と述べるに至る (Mersenne 1634-1, 69-71; Lenoble 1943, 347-8)。同じことは、力能ある神が万物のありようを改変してしまうことの可能性からも導かれる (Mersenne 1634-2, 9)。いずれにせよ、この時期のメルセンヌは、アリストテレス的な自然学の不確かさを名指しで批判するのである。さて、こうした自然学に対する悲観は、メルセンヌの学問に新たな目的を与えることになる。第一に、メルセンヌが目指すのは、事物の真なる原因に関する探究ではなく、現象の原因の探究である。つまり、メルセンヌの機械論は、単に自然学から目的論を排除するだけでなく、むしろ、われわれに現れる現象としての限りでの事物に因果的な説明を与えることのみを目指す、現象主義的な機械

論である (Lenoble 1943, 360)。第二に、こうした現象主義の導入に応じて、学問知識の真理性に関しても新たな見解が加わる。実際、実在する事物についてのいかなる確実な知も持ちえないならば、事物と認識における対応という仕方では知識の真理性を保証することはもはやできない (真理の対応説)。代わりにメルセンヌが持ち出すのは、ある知識がわれわれにとって「使用できる」かどうか、すなわち「有用性」という基準である (Mersenne 1634-2, 64; Lenoble 1943, 355)。この点で、メルセンヌは「プラグマティズム」の先駆として描かれる。第三に、自然の法則の偶然性に応じて、実験の必要性が強調される。実験は、必ずしも真理を見出すものではないが、自然においてそもそも必然的な真理が成り立っていない以上は、場合によっては推論よりも信頼できる方法となる (Mersenne 1634-2, 153-4; Lenoble 1981, 357)。以上三点から、メルセンヌの先駆的な近代性を強調するのが、Lenoble の研究のポイントである。

Lenoble が提示したメルセンヌのプラグマティックな一面は Popkin によって、現象主義的な一面は Marion や Carraud によって、それぞれ敷衍されてきた。もっとも、今日の研究にあつては、修正を要する点もある。Garber は、メルセンヌが学問の近代化を推進したことを強調しつつも、その哲学はその実反アリストテレス主義的ではないと主張する (Garber 2004, 158)。メルセンヌは偶然的な事物にのみ適用される「混合数学」としての自然学というアリストテレス的な概念を多分に使用しているのである。その革新的な点はむしろ、アリストテレスの自然学の定義を変化させないまま、近代的な自然学を目指したことにある (Garber 2004, 141)。すなわち、メルセンヌが自然学を数学化するという点においてである。諸学を数学化しようとするメルセンヌのプロジェクトについては、Carraud の研究に言及する際に再び詳述する。

(2) Richard Popkin の『懐疑主義の歴史：エラスムスからデカルトまで』(1960) (なお、『サヴォナローラからベールまで』と副題を改めた増補版が2003年に刊行されている) は、文字通り近世の懐疑主義の歴史を、対抗宗教学改革を主な背景として、信仰と懐疑の関係を統一的な視座のもとで描き出した記念碑的な研究である。Popkin のストーリーは概ね次の通りである。モンテーニュによって近世哲学に蘇った懐疑主義は、古代懐疑主義にキリスト教的敬虔さを兼ねたものであった。つまり、現れを現れとしてのみ受け入

れる態度は、とりわけ自然的物事についての知性的認識の拡大に対抗し、むしろ一個の被造物としての人間の謙虚さに結びつく (Popkin 2003, 48-9)。そして、既存の社会構造に対する懐疑主義的順応主義は、カトリックの積み重ねてきた教義を改革するよりもむしろ受け入れることへとひとびとを促す (Popkin 2003, 53)。こうして、護教論的に味付けされた敬虔な懐疑主義が出来上がる (Popkin 2003, 51)。この敬虔な懐疑主義は、その弟子シャロンを経由して後代に引き継がれ、最終的にはデカルトの形而上学的独断論によって反駁された (Popkin 2003, 143-157)。ところで、宗教的というよりもむしろ科学的な関心から、懐疑主義への反撃を開始したのがメルセンヌ(とガッサンディ)である (Popkin 2003, 112-127)。メルセンヌは、懐疑主義の議論を逆用しながら学問の成立可能性を擁護する、「緩和されたもしくは建設的な懐疑主義 Mitigated or Constructive Scepticism」の立場をとる。『諸学の真理』のメルセンヌは、事物の本性を認識することの不可能性を声高に主張する懐疑主義者(ピュロン主義者)に対して、「哲学者」に次のように抗弁させている。われわれの学問のために、そもそも事物の本性の認識は不要である (Mersenne 1625, 150-1; Popkin 2003, 115-6)。われわれは、あくまでも学問知識を可能的なものとして受け入れれば良いのであって、何も実在する事物の本当のありようを捉えるものとして捉える必要はない。そうした可能的な知識であっても有用なのだから、それで十分なのである (Popkin 2003, 114-5)。Popkin のこうした解釈は、Lenoble の指摘するメルセンヌのプラグマティズムを、懐疑主義の文脈に置き直しつつ敷衍したものとして理解できる。

ポプキンの研究は、今日の研究水準にあつて、その細部においては修正を要するものの、大きな筋書きとしては力を持ち続けている。特に、メルセンヌが懐疑主義に対してある種のプラグマティズムを提示したという興味深い指摘は、近世・近代の哲学研究においてしばしば言及される (久米 2005, 112-3)。だが、先述の Lenoble の見解では、メルセンヌの思想は伝統的哲学から機械論的新哲学への転回を経ているはずである。仮に Popkin の言うような先駆的な見解がメルセンヌにあったとしても、それが伝統的哲学にコミットしていた時期の『諸学の真理』にも見られるというのは、Lenoble の解釈と符号しない。さらに、Dear は、「建設的ないし緩和された懐疑主義」がメルセンヌの対懐疑主義論法として認められることは否定しないが、これはキケロ以来の蓋然主義の後継であり、メルセンヌがラ・フレーシュ学院で

受けたイエズス会的教育の所産として見られるべきだと主張している (Dear 1988, 27)。彼はメルセンヌの「非革命的性格」を強調するのである (Hamou 2018)。Popkin の研究は、今日このような後続の諸研究にとって叩き台的な役割を担っているのだが、それでも、「緩和された懐疑主義」の発想そのものはメルセンヌ解釈から一掃されたわけでもなく、いまなお議論の余地を残している。

(3) Jean-Luc Marion の『デカルトの白の神学』(1981) は、タイトルの通りデカルトの研究書ではあるが、周辺の哲学史的事情をめぐる細緻な分析を特徴としており、メルセンヌにも一節を割いて論じている。近世哲学研究に大きな影響を与えた著作であるだけに、その後のメルセンヌ解釈の方向性の一部を規定している。

Marion は、Popkin 同様、近世哲学を貫くひとつの大きな潮流の中にメルセンヌを位置付ける。その潮流とは、世界の究極的な原理としての神についての、中世的な「アナロギア (類比)」の思想から近代的な「一義性」の思想への転換である。ごく切り詰めて言えば、世界内的な諸々の存在者と神との存在論的な身分の差異を強調するのがアナロギアの思想であり、反対に、両者に共通の身分を認めるのが一義性の思想である。アナロギアの思想における神は、われわれ人間には理解できない原理に基づき活動するので、その神によって創造された世界はわれわれには解明し尽くすことのできないものとなる。メルセンヌ、ケプラー、ガリレオといった近代を先駆する科学者たちに特徴的なのは、こうしたアナロギアの思想を棄て、神が (人間と共通の) 数学的な規則にしたがって活動すると主張することで、神の活動とその反映としての世界とを解明可能なものとして捉えようとする傾向である。こうして「数学者の神 *le Dieu mathématicien*」と呼ばれる神概念が練り上げられていくことになる。Marion の図式においては、メルセンヌはまさにこうした一義性の哲学を推進した一人として描かれる (Marion 1981, 160-227)。ただし、先述の Lenoble の研究もメルセンヌがアナロギアの思想をその自然学において無用のものとして、単に道徳的・形而上学的な領域でのみ使用していることを指摘しており (Lenoble 1943, 276)、Marion の図式はこれを哲学史的に敷衍したものと言える。

Marion のメルセンヌ解釈の中核には、デカルトとの関係を明らかにしようとする関心がある。デカルトは、1630年4月から5月の三通の書簡 (1630

年4月15日、5月6日、5月27日）で、真理と神の関係をめぐる形而上学的問題に関してメルセンヌと議論を交わした。そのやりとりを通じて露わになったのが、デカルトの「永遠真理創造説」と呼ばれる学説である。デカルトは、「永遠的だとあなた〔メルセンヌ〕が言う数学的真理は、他の被造物同様神によって創造された」（AT I, 145, 7-10）と主張する。要点のみを述べれば、この説は、世界を創造した神に関してはその把握不可能性を強調することでアナログアの立場をとる一方で、真理を神の被造物とみなすことで解明可能なものとする点では一義性の立場をとる。神と被造物間のアナログアと、真理とその他の事物の間の一義性のハイブリッドである。メルセンヌがこの説に対して返答した書簡は残っていないが、デカルトからメルセンヌに応じた書簡の内容からすれば、おそらく何らかの反論ないし質問を投じたのだろう。その点ではデカルトとメルセンヌを対照的な立場として扱うことができる。こうした文脈のもとで、Marion はメルセンヌの一義性の哲学を、主に『創世記問題集』を典拠としつつ明らかにしていく。掻い摘んで示せば、次の二点が重要である。第一に、真理はいかなる原因にも依拠しないという点で、神による被造物ではない。むしろ、神のいかなる決定にも先立って、因果関係からは独立に、数学的・論理的な規則によって規定されている（Mersenne 1623, 332; 446; Marion 1981, 174）。第二に、だからといってこうした真理に対して神が服従するということにはならない。もとより、神とメルセンヌが呼ぶのは、自ら自身を認識することによってあらゆる真理を洞観するような、必然的で無限の存在者である。そして神の自己認識は、数学的・論理的な規則を伴う。したがって、神が規則に服従するのではなく、むしろ神自身が数学的・論理的な存在なのである（Mersenne 1623, 402; Marion 1981, 175）。大雑把に言えばメルセンヌは、神を規則の下に置くのではなく、規則の方を神と同等に高く評価するのである。この限りで、メルセンヌの神はわれわれにとっても理解可能な規則性を伴うものとなり、いわゆる「数学者の神」となる。

ところで Marion の解釈は、神と真理という形而上学的問題に傾注したものであるが、メルセンヌの哲学体系の内部に立ち入った考察ではない。後に Carraud は、Marion の解釈に従いつつ、『諸学の真理』、『創世記問題集』、『未聞の問題』など複数のテクストに基づき、メルセンヌの学問体系の内部における神学・数学・自然学の一義性を明らかにした（Carraud 1994）。Carraud によれば、メルセンヌは数学を学問の模範とみなし、自然学と神学

とをそれぞれ数学化する。ここでの「数学化」の内実は、自然学や神学の方法において数学的計算や数学的厳密性が求められるようになったことに尽きない。むしろ、自然学・神学の対象が数学の対象と同様の身分で考察されるようになったというのが精確である。一方で神学においては、Marionの論じる通り、神が数学者として解されるのに応じて、数学を研究することそのものが神について語ることと同義となる（Carraud 1994, 153）。他方で自然学の数学化は、形而上学の数学化に相関的である。元来、自然学は実在する物体についての学であり、その実在を保証するのが形而上学である。だが『未聞の問題』のメルセンヌは、形而上学が物体の実在を証明することができないと考え、いわゆる「実体の学」としての形而上学の構想を断念する（この構想は『諸学の真理』までは確認できる）（Carraud 1994, 157）。こうして、もとより事物の実在に関する探究が放棄され、自然学は形而上学とともに「可能なもの」をめぐる学問として組み直される。以上のように、神学と自然学は、ともに数学的な理論的身分、すなわち「可能な学問 science possible」としての地位を与えられることになる。Carraudは、後期のメルセンヌにとっては学問はすべて可能なものをめぐる「表層的な superficiel」ものであるとして、こうしたメルセンヌの学問観をある種の現象主義として特徴付けている（Carraud 1994, 158）。数学を中核に置きメルセンヌの学問体系を解釈する視点は、川田（1998）やGaber（2004）と軌を一にするものであり、今日のメルセンヌ研究の標準的な見解と言えよう。

また、Mehlは、メルセンヌにおける「可能なもの」概念について、基本的にMarionやCarraudの見解に添いつつも、そこにスコトゥス主義からの影響を見出す（Marionはメルセンヌとスアレスの見解を同一視していた）（Mehl 2013）。メルセンヌが「可能な学問」というモデルを採用していたことはCarraudが指摘していたが、彼は「可能なもの」についてのメルセンヌの思索を十分に掘り下げてはいなかった。Mehlは、『創世記問題集』における「可能なもの」論を取りあげ、メルセンヌがスコトゥス主義者とともに無矛盾性と形而上学的可能性を同一視し、同時に、因果的な可能性はもっぱら神にとってのみ知られるものとみなしたと指摘する（Mehl 2013, 132）。このような観点からも、形而上学が論理的な可能性に依拠する学問として解されていることが確認できる。なお、このMehlの指導下で、近年「メルセンヌの著作における音楽と数学と哲学」と題された博士論文が提出された（Basilico 2017）。管見の限り未だ書籍化はされていない。細かく検討するこ

とはできていないが、メルセンヌの音楽論を中心として哲学的問題を解釈することを眼目とし、Lenoble、Popkin、Marion 等の研究を紙幅を割いて批判的に吟味しているようである。

「一義性の哲学者」としての Marion 的なメルセンヌ評価は、今日なお検討の対象となるものである。もっとも、Carraud が暗に示したように、「一義性」という括りはともすると「現象主義」の一語に回収できるのかもしれない。だが、一義性の概念はメルセンヌ内在的な解釈のためよりも、彼を哲学史の流れに位置付けるために優れた道具である。実際、Marion の解釈はメルセンヌとデカルトの対照を描き出し、これを引き継いだ Carraud はライプニッツへの展開を示唆し、Mehl はスコトゥス以来の系譜を明確にしたのである。

4. まとめ：メルセンヌと学問の公共性

以上われわれは、近世における学問の公共性という関心に導かれ、メルセンヌ・アカデミーの活動とメルセンヌ自身の哲学的思索についての研究を概観してきた。この前者と後者、すなわちメルセンヌの公的・対外的な活動と彼固有の思索とは、当然ながら何らかの仕方で連動しているだろうが、それを詳かにするのは容易ではない。しかし、学問の公共性という観点から見れば、この両者がともに重なり合う点を見つけ出すことはできる。

メルセンヌ・アカデミーは、研究者のネットワークを構築し、誰かが発見した新たな知見は、情報開示の原則に従ってネットワーク構成員のもとに開示された。平たく言えば、学問探究の営みそのものが公共的なものとなったのである。知識のこの公共性が 17 世紀の学問を進展させたことは言うまでもなからう。

他方、メルセンヌ自身の哲学は、現象主義、実証主義（蓋然主義?）、緩和された懐疑主義、一義性の哲学、可能性の学問といったキーワードに彩られる。Popkin は、メルセンヌにおいて知識の「有用性」という基準が強調され、基礎づけられた真理への固執から解放されたと指摘する。また、Carraud が明らかにしたように諸学問は数学化し、一義的なものとなる。両者の解釈から、研究の専門化と分業体制を成立させようとするメルセンヌの試みが理解されるだろう（川田 1998, 116-7）。もとよりメルセンヌは「それぞれの学者は、最も好まれるひとつの分野に没頭すべきだ」との考えをもつ

ていた。もちろん、諸学の間基礎づけ的な優劣ないし先後関係があると考える場合には、数学者として形而上学を修めないわけにはいかなくなり、専門の研究にのみ没頭することはできなくなる。しかし、もし諸学が一義的なものとして同等の身分をもつならば、各分野を専門的に研究することに妨げはない（数学者が形而上学者にどやされたりしなくなる）。こうした試みを「学問の世俗化」というよく知られた枠組みに収めてしまうのはもったいないのではないか。むしろ現代の科学におけるような、知識の所有主体を個人ではなく集団とみなすような発想がメルセンヌにあったかどうかは定かではないのだが、それでも、共同研究を推進することは個人主義からの緩やかな撤退を促すことになるだろう。少なくとも、ただ一人の手による構築物に美しさを認め、数学者に神の存在を認めるよう求め、すべての学者に一生に一度の形而上学的省察を要求したデカルトとは、大いに対照的な構想が、メルセンヌにあったことはどうやら確かである（デカルトとの立場の相違は、Buccolini 2019 に詳しい）。メルセンヌのこうした学問観を念頭に、近世における知識の公共性についての考察を進める必要がある。

文献表

メルセンヌの著作は、基本的に初版を参照し、引用の際はその刊行年を記す。ただし、書簡に関しては全書簡集から引用し、CM と略記の上、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で記す。

CM: Mersenne, M. *Correspondance du P. Marin Mersenne*. P. Tannery, C. De Waard, R. Pintard, B. Rochot (eds.). Paris: G. Beauchesne (1932-1988).

—— (1623). *Quaestiones celeberrimae in Genesim*. Paris.

—— (1625). *La Vérité des sciences contre les septiques ou Pyrrhoniens*. Paris.

—— (1634-1) *Questions Inouyes*. Paris.

—— (1634-2) *Questions théologiques, physiques, morales et mathématiques*. Paris.

Armogathe, J.-R. (1992). Le groupe de Mersenne et la vie académique parisienne. *Xviiie Siècle*, 44, 131-139.

- Basilico, B. (2017). *Musique, mathématiques et philosophie dans l'oeuvre de Marin Mersenne* (Doctoral dissertation). Available on HAL.
- Brown, H. (1934). *Scientific organizations in Seventeenth Century France (1620-1680)*. Baltimore: The Williams and Wilkins Company.
- Buccolini, C. (2019). Mersenne: Questioning Descartes. *The Oxford Handbook of Descartes and Cartesianism*. S. Nadler, T. M. Schmalz, D. Antoine Mahut (eds.). Oxford: Oxford University Press.
- Carraud, V. (1994). *Mathématique Et Métaphysique: Les Sciences Du Possible. Les Études Philosophiques, 1/2*, 145-159.
- De Coste, F. H. (1649). *La Vie du R. P. Marin Mersenne Théologien, Philosophe et Mathématicien*. Paris.
- Dear, P. (1988). *Mersenne and the Learning of the Schools*. New York: Cornell University Press.
- Descartes, R. (1974). *Œuvres de Descartes. 1*. C. Adam, P. Tannery (eds.). Paris: Vrin.
- Fontenelle, B. B. (1733). *Histoire de l'Académie Royale des Sciences: Depuis son établissement en 1666 jusqu'à 1686. 1*. Paris.
- Garber, D. (January 01, 2004). On the frontlines of the scientific revolution: How Mersenne learned to love Galileo. *Perspectives on Science, 12*, 135-163.
- Hamou, P. (2018 May 11). *Marin Mersenne*. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <https://plato.stanford.edu/entries/mersenne/>
- Lenoble, R. (1943). *Mersenne, ou, La naissance du mecanisme*. Paris: Vrin.
- Marion, J.-L. (1981). *Sur la théologie blanche de Descartes*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Mehl, É. (2013). La Cétation des vérités éternelles: Descartes s'est-il forgé un adversaire scotiste? *Archa Verbi*, 119-138.
- Pascal, B. (1908). *Œuvres de Pascal. 1*. L. Brunschvig, P. Boutroux, A. Gazier (eds.). Paris: Hachette.
- Popkin, R. H. (2003). *History of Scepticism: from Savonarola to Bayle*. New York: Oxford University Press.
- Walker, D. P. (1978). *Studies in musical science in the late Renaissance*. London: Warburg Institute, University of London.

- 赤木昭三・赤木富美子.(2003).『サロンの思想史』名古屋大学出版会.
- 大沢秀介.(1996).「知の個人主義：近代哲学の神話」森際康介編『知識という環境』名古屋大学出版会.
- 川田勝.(1995).「メルセンヌの学問擁護論」『化学史研究』22: 263-287.
- (1996).「メルセンヌの初期アカデミー思想：メルセンヌアカデミー研究 (I)」『化学史研究』23: 285-301.
- (1998).「メルセンヌアカデミーの思想と展開：メルセンヌアカデミー研究 (II)」『化学史研究』25: 108-125.
- 久米暁.(2005)「ヒュームによる認識論的規範性の見直し」中才敏郎編『ヒューム読本』法政大学出版局.